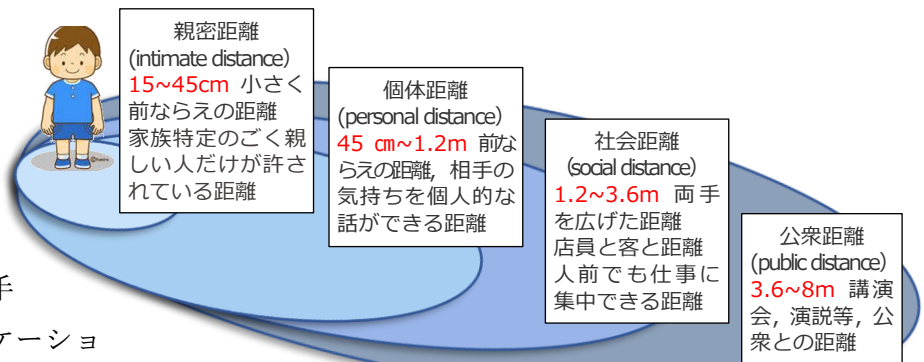


2019. 10月

日常生活を送っていると、相手との距離感が時に気になることがある。公私ともに良好な関係を築いていたり、付かず離れずの関係を選んだりするものだ。前者は親友だったり、後者は職場の同僚だったりの関係かもしれない。

人間は誰も、固有な距離感（Personal Space）を持って生活している。この距離感が適切に保てない子どもにもがいたる。幼児期や低学年なら不思議でもないが、やたらとベタベタしてきたりする高学年の子どももいる。本人はわからないが、相手からは近すぎるとか距離感がおかしいと思われていることがある。

相手との距離感をアメリカの文化人学者であるエドワード・ホールが研究して、右図のように4つに分類した。これは、個人や年齢・男女、また国際・文化によっても差はある。固有のスペースがどのくらい広いかわかる事は、自分の相手との距離の取り方＝コミュニケーションの特徴を知ることにつながる。ここを子どもが理解することで、「自分のコミュニケーションの取り方がどうなのか」を考えるきっかけにもなると思う。

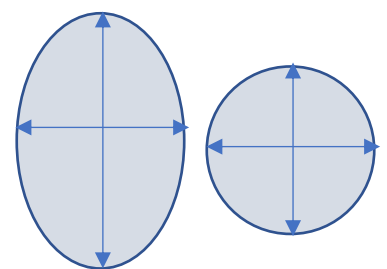


Edward Hall(1966)・川上康則(2014)から

対人関係で悩みを抱え、対人関係で躓く子どもや人間関係づくりを苦手としている子どもが増えてきている。全員がそうだとはいえないが、距離が近い（相手との距離感がわからない）という子は、発達障害もしくはなんらかの発達における困難さがあるかもしれない。例えば、自閉スペクトラムの子は、相手の気持ちがなかなか理解しにくい傾向にあるので、どのような距離感で接してよいか分からず、近すぎる行動をとることがある。また、愛着障害のある子は、具体的な場面での距離感を教える必要性が出る場合がある。

親密距離内に関係の薄い子どもが入ってくると、不快を強く感じるし、個人距離内においても同様な感じを受けるという。その子がどのスペースにいるか、どのような感じを持っているか代弁することも必要であろう。いずれにしても、パーソナルスペースを観察する眼力を我々はもちたい。（芝）

男女のパーソナルスペースの差



縦長で、前方が長い。横幅が狭い。

ほぼ完全な円で、上下左右均等